鈴木ビアトリスの仏教から生まれた詩

田　中　泰　賢

鈴木大拙博士と結婚したアメリカ人女性、鈴木ビアトリス・レイン（Beatrice Lane Suzuki, 1878−1939）は昭和14年（1939年）7月16日、東京築地聖路加病院で亡くなっている[1)]。翌年の昭和15年（1940年）に鈴木大拙は『青蓮佛教小觀』を出版している。発行者は鈴木貞太郎、非賣品となっている。この書物から鈴木大拙博士の妻への深い愛情を知ることが出来る。この本は夫人の鈴木ビアトリスが存命中に仏教について書いたもの（全部ではない）で、五編の構成からなっている。鈴木大拙はその書物の「はしがきと思ひ出」の中で夫人、鈴木ビアトリスについて次のように述べている。

> 亡妻ビアトリスは Radcliffe College を卒業し、後 New York 市の Columbia 大學で社會學を修め M.A. となる。ラドクリフ・カレヂは Harvard 大學の女子部のやうであつたので、その頃該大學の教授はラドクリフ・カレヂをも教えへた。ビアトリスはそれで James, Royce, Santayana など云ふ教授から哲学の講義を聞いた。折々はそれら大學先生の講義ぶりや個人的性格の特異性を語って居たこともある。[2)]

鈴木ビアトリスは自身も述べているように「大學に入り幸にもウィリアム・ヂェームス、ヂョサイア・ロイス、サンタヤナ諸教授のやうな立派な先生方について、薫陶を受けました。尤も私は謂はば傍觀者として冷静な態度で、さまざまな哲学思想を渉猟したのに過ぎませんので、これこそ自分のものだと思ふやうな哲學は一つも見出すことが出来ませんでした。（中略）その後、鎌倉、圓覺寺の管長であつた釋

宗演師が二度目に米国を訪問されたとき、私は、師と同行して来た鈴木大拙氏を知るやうになりました。大乗佛教の眞理はここに初めて提示せられ、私はその教へに強く心を惹かれました。」[3)]

鈴木ビアトリスと1歳違いのアメリカ現代詩を代表する詩人であったウォレス・スティーヴンズ（Wallace Stevens, 1879–1955）は「ハーヴァード大学の学生の頃、サンタヤナの講義は受けなかったようであるが、スティーヴンズの友人を通してサンタヤナを知るようになった。そしてサンタヤナの研究室で開かれた、いわばサロン風読書会に顔を出した。そこでサンタヤナを中心にして詩や思想について自由に話し合うことができた。そしてこれを機縁としてスティーヴンズはサンタヤに私淑した。はるか遠いローマに住んだサンタヤナが亡くなるまでスティーヴンズは深く敬慕し続けたのである。」[4)]学生であった頃の鈴木ビアトリス及びウォレス・スティーヴンズとサンタヤナ先生との出会いはそれぞれ異なっていたがともに薫陶をうけたことに違いはない。

ヴァン・ミーター・エイムズは著書の中で、「サンタヤナはインド哲学と仏教に大いに敬意を表していた。それらが示す洞察力のいくらかを共有していた。そしてサンタヤナは東洋の老師たちのように詩人でもあり哲学者でもあったが、彼の態度は自然にたまたま身につけたものではなく、修養の結果、正しい態度となったのである」と書いている[5)]。サンタヤナはハーヴァード大学を卒業するとヨーロッパに留学した。その後、ショーペンハウエルを研究主題にしたかったが、ロイス教授は他の哲学を薦めたので実現できなかった。しかしヴァン・ミーター・エイムズが述べているようにサンタヤナはインド哲学や仏教に関心を抱いていたことがわかるのである。サンタヤナはハーヴァード大学の先生をしていた時のことを次のように語っている。

> ハーヴァード大学の学長が、たまたまある学期の開始後まもなく私（サンタヤナ）と顔を合わせたことがある。彼は君の授業はうまくいっていますかと尋ね、それに対して私がうまくいっている

> と思います、学生たちは熱心で頭がよいようですと答えたところ、彼は何を余計なことを喋っているのだといわんばかりに私を遮った。「私のいうのは」と彼はいった――「君の授業には何人出席しているか、ということですよ。」[6)]

サンタヤナは学長が立場上とはいえ学生の受講している人数にこだわることに対して、疑問を呈している。サンタヤナは「すべての学問は善きものである――さもなければ大学なんてなぜあるのか」[7)]と受講者数のみで教師の価値を判断してしまう危険性に警鐘を鳴らしている。このようなサンタヤナの学問への姿勢をおそらく鈴木ビアトリスも授業で表現は違っても聞いたのではないだろうか。幸いにも鈴木ビアトリスは釈宗演老師たちと出会って仏教に入って行く機縁を与えられた。しかしそこにたどりつくためには学生時代に受けたサンタヤナを始めとした先生方の授業から受けた学問も決して無視できないものと思われる。ジュディス・スノドグラスは鈴木ビアトリスについて次のように書いている。

> ビアトリス鈴木は、結婚前の段階においてすでに経験を積んだジャーナリストかつ書き手であった。彼女は、ラドクリフ大学を卒業後、コロンビア大学で修士号および社会事業の資格証明書を取得するなど、非常に高い教育を受けていた。これは、大学教育を受ける女性がほぼ存在しなかった時代のことであった。彼女は世紀の転換期にボストン・メール紙その他で執筆ジャーナリストかつ詩人であった。[8)]

ここでジュディス・スノドグラスが鈴木ビアトリスは詩人でもあったと述べていることに注目したい。鈴木ビアトリスは日本に来てから1920年代から1930年代にかけて仏教について多数の論考を精力的に書き続けたことはよく知られている。それに比べると量的には少ないが、当時の東本願寺門主、大谷光演上人（明治八年、1875～昭和十八年、1943）の俳句を七句英訳している[9)]。上人は大谷句仏という名前で俳句を作っていた。鈴木ビアトリスはまた親鸞聖人の浄土和讃、釈

宗演の詩なども英訳している。鈴木大拙博士が編集した『青蓮佛教小觀』の最後に鈴木ビアトリス本人が創作した詩が記載されている。ここに鈴木大拙は夫人が詩人でもあったことを理解していたことが分かる。鈴木ご夫妻の強い愛情に感動する。今回はその鈴木ビアトリスが日本で創作した詩の幾つかを紹介したい。

To Gessho Sasaki

When I look out at my garden here among the mountains,
And see the moon-flowers blooming every night,
(They are so beautiful, like the flowers that grow in Gokuraku,
But frail and short-lived as are the blossoms of this our
world),
I think of you and of the short night that you were with us.
The dawn came too soon and you have left us,
So many works unfinished, your splendid activity cut short;
Surely in the Pure Land where you are dwelling,
Your thoughts help us who are left here behind.
This is our wish —to do those things you desired, to help those
works for which you laboured;
And while we mourn, the thought of you shall be our inspi-
ration.
O Moon-flower in my mountain garden,
Blooming tonight in heavenly radiance!
Carry this message to that farther shore
When you open your petals again in the garden of the Pure
Land.[10)]

佐々木月樵氏へ

山並みのここで私の庭を眺め
毎夜咲く夕顔を見る時、
（それらの花はたいそう美しく、極楽に生える花のように、
しかしはかなく、命短い私たちの世界の
　花のように）、
あなたのことやあなたが私たちと共に過ごした短い夜のことを
思い出す。
暁はあまりにも早く、あなたは去っていった、
完成したかった多くの仕事、あなたの立派な活動が志半ば
　で終わってしまった；
きっとお浄土で過ごしておられることでしょう、
あなたの思想のお陰でここに残されている私たちは救われてい
　る。
あなたが強く望んでいたことを完成する事、あなたが取り組んで
　いた仕事を
　推し進めることが私たちの願い；
あなたを悼む時、あなたへの思い出から感動が
湧き出てくる。
ああ、私の山地の庭の夕顔の花よ、
燦然と輝いて今宵も花開いているわ！
書き記した言葉が彼岸に届きますように
お浄土の庭であなたが再び花びらを
　　開く時。（拙訳　以下同じ）

原文の 1 行目にある “here”（ここで）は文字通りには「この場所」を示している。この “here”（ここで）はこの詩の真ん中、10行目でも使用されている。この言葉が原文の上から 3 行目の “Gokuraku”（極

楽）及び 9 行目と最終行の “the Pure Land”（浄土）そして下から 3 行目の “farther shore”（彼岸）と対置していると理解すれば “here”（ここで）は地理的な場所を指すだけではなく、「この世で」も暗示していると解することも出来る。上から 4 行目〜 5 行目の “this our world”（この私たちの世界）によってこの世とあの世が対置されていると頷くことが可能となる。

原文の上から 2 行目の言葉 “the moon-flowers”（夕顔の花）に鈴木ビアトリスの工夫が感じられる。「朝顔」（“the morning glory”）と表現せず、「夕顔」（“the moon-flowers”）という言葉を選んだことによってこの詩に幻想的な雰囲気を醸し出している。「夕顔」は古来日本では『源氏物語』及び「能」などで登場することはよく知られている。鈴木大拙は夫人について「亡妻は日本のことは何でも好きであった。特にお寺詣と能や芝居を見ることを好んだ」[11] と回想している。鈴木ビアトリスも「『源氏物語』の作者、紫式部も亦熱心な佛教信者であり、尼将軍と呼ばれた平政子、この方も佛教の為に大いに盡力せられ、澤山の寺院を建立するためにお骨折りをなされております」[12] と書いている。日本についてよく調べていることが分かる。そればかりではなくこの原文の 1 行目の「私の庭」（“my garden”）が示しているように「夕顔」は栽培されていることがうかがわれる。そこから「夕顔」は鑑賞する花だけにとどまらず、食用として「夕顔」の果肉を干して出来る干瓢も連想される。ここにアメリカ人の実用的考え方を受け継いだ作者と日本人の実用的な思いが一致する表現のようにも思える。

夕顔は夕方に花を開いて翌朝にはしぼむのではかなさを象徴している。このはかなさを補うように上から 4 行目の “frail”（もろい、こわれやすい、はかない、つかの間の）や “short-lived”（短命の、つかの間の、はかない、一時的な）が使用されている。さらに上から 6 行目の “the short night”（短い夜）や上から 8 行目の “cut short”（志半ば、短縮する、早めに帰途に就く、急に終わらせる）といった表現もはか

なさをあらわしている。下から 5 行目の “O Moon-flower”（ああ、夕顔よ）は夕顔に呼びかけて、お願いをしている詩的な表現であろう。お彼岸に住しておられる佐々木月樵氏に作者は一生懸命仏教について論考を書くという伝言を伝えてほしい願いを夕顔に託している。お浄土で佐々木月樵氏が作者の手紙を読んで欲しい気持ちを夕顔の花びらを開くというように表現している。ここは素晴らしい詩の締めくくりである。

確かに鈴木ビアトリスは日本に来てから亡くなるまで仏教を世界に向って発信し続けた偉大な人であった。この詩の末尾に「この詩は1926年 8 月 5 日、軽井沢で書く」と記されている。「佐々木月樵氏は明治〜大正期の真宗大谷派の学僧。東本願寺の宗教改革および宗教教育に力をそそいだ。愛知県生まれ。1921年（大正10）に宗教・教育事情視察のため欧州へ渡り、帰国後の1924年には大谷大学学長となり機構整備に努めた。」[13)]鈴木ビアトリスが仏教について書いた論考は主に仏教学雑誌 *The Eastern Buddhist* 誌上であった。ロバート F. ローズ教授は「この雑誌の誕生については、故坂本弘先生が「大谷大学時代の鈴木大拙先生」（上田閑照・岡村美穂子編『鈴木大拙とは誰か』、岩波現代文庫、2002, pp. 213–223）のなかで詳しく紹介されていると述べた上で、この仏教学雑誌 *The Eastern Buddhist* の創設の背景には当時大谷大学の学長、佐々木月樵と鈴木大拙の強い願いがあった」[14)]と改めて紹介している。佐々木月樵の東洋の英知である大乗仏教を正しく伝えること、日本の仏教研究を広く海外に英語で紹介すること、大谷大学を世界的な仏教研究センターにするという夢があった。鈴木ビアトリスは詩の中でその佐々木月樵たちの夢を出来るだけ実現したいと書いている。そして本当に彼女は全身全霊を捧げて書き続けたのである。

上田卓爾は新たに発見した鈴木ビアトリス（日本名、鈴木琵琶子）著「Rambles in Ancient Kyoto」（日本語訳「京洛逍遥」）を調べた結果次のように述べている。「鈴木大拙夫人の著した記事はほぼ同時期に

発行された『日本案内記』や日本で発行された英文ガイドブック、現代のロンリープラネット、ミシュラン・グリーンガイドの記述内容と比べてみると、量・質ともに遥かに凌駕しているものであることが判明した。」[15] このことからも鈴木ビアトリスの仏教や仏教寺院について書き記す情熱は佐々木月樵の願いから来るものも大きかったと思われる。

鈴木ビアトリスは次のような詩も書いている。

At A Kyoto Temple

In the vast temple shadows are falling,
Priests' voices rise in an anthem of prayer,
Incense is floating, candle-lights gleaming,
Pious hearts beating, hands clasped with beads,
Namu-amida is heard on all lips.
Praise be to Buddha! Praise be to Shinran!
See through the temple shadows are gathering,
Voices are praising, heads they are bent,
Praise be to Buddha!
Praise be to Shinran!
Hark ! Hear the bell!
Hark ! Hear the bell![16]

京都のお寺で

大きなお寺の中に夕闇が垂れ込めている、
僧侶たちの声が祈願の声明で高くなる、
お香の香りが広がり、ろうそくの明かりがかすかに光っている、
篤信の人々が合奏する、手に数珠を握って、
「南無阿弥陀仏」の声が全ての人々の口から聞こえてくる。
ありがたや仏様　ありがたや親鸞様

見よ　お寺の端から端まで人々の影が集っている、
声明が歌われ、首を垂れた人々、
ありがたや仏様
ありがたや親鸞様
お聞きなさい　鐘の音が聞こえる
お聞きなさい　鐘の音が聞こえる

この詩が含まれている論考 “Kyoto Temple Celebrations” は1924年の *The Eastern Buddhist* 誌、Vol. III 1に掲載されている。この時の著者、鈴木ビアトリスの名前は論考の終りに Seiren（Blue Lotus）と記されている。鈴木大拙は「ビアトリス法號を『青蓮院琵琶妙演大姉』となす。それで此書に題して「青蓮佛教小觀」と云ふ。『青蓮』は圓覺寺で参禅した頃、管長廣田天眞師より授けられしもの」[17]と書いている。だから “Seiren” とは「青蓮」をローマ字で表記したものであり、“Blue Lotus” はそれを英語に訳したということは言うまでもない。上記の論考 “Kyoto Temple Celebrations” は2013年に出版された Beatrice Lane Suzuki 著『Buddhist Temples of Kyoto and Kamakura』Michael Pye 編 equinox 出版の55〜57頁に再録されている。鈴木ビアトリスはこの1924年の論考 “Kyoto Temple Celebrations” の中で具体的な年を明記していないが、親鸞聖人の御命日の行事にお参りしたことを書いている。お寺の中は非常に多くの参拝者達でいっぱいであったという。その様子を上の詩に表していると思う。

原文の1行目の “shadows” を文字通り「影、夕闇」として “shadows are falling” は「夕闇が垂れ込めている」と訳してみた。しかし多くの信者の方々で埋め尽くされた状態から推測して「人々の影が頭を下げている」と解することも出来るであろう。それは原文の下から6行目 “through the temple shadows are gathering”（お寺の端から端まで人々が集まっている）という表現が呼応するからである。では何故原文で “shadows”（夕闇、影、人々の影）が使用されているだろうか。鈴

木ビアトリスはその論考の中で、当時、その聖なる建物内で電球の使用が許可されていなかった。そのことを感謝すると述べている。上から3行目の「ろうそくの明かりがかすかに光っている」薄暗い建物の中では人々が影のように見えたことであろう。数千人の人々が唱える「南無阿弥陀仏」の声に鈴木ビアトリスは感銘を受けたことであろう。この詩は夕闇が垂れ込めているお寺で僧侶、信者たちが一体となった神秘的な雰囲気から生まれたと思う。

鈴木ビアトリスは高野山の詩も書いている。

At Koya
（西南院）

1

In the deep pool—the golden carp,
In the pine-trees—the summer breeze,
On the rock edge—king fisher blue,
In my heart's depth—profound calm,
Here in the garden of Sainan-In.

2

How far away they seem
All the petty cares, the trifles of Life.
Here in the temple!
I feel myself expanding,
As I become the All, the parts drop away.
Indeed no parts are left,
There is only One.

3

Birds, birds, birds!
Wagtail, kingfisher, mountain dove.

Why do you come to this temple garden?
When I look at your pure beauty,
I feel sure that you have come
To worship the Buddha.

4

A strange quiet
As if a Buddha stood at the edge of the wood
With his finger on his lips.
The birds, the carp, the leaves, even I,
Aware of his presence,
Suspend all movement.[18)]

1

神秘的な池に――金色の鯉、
松の木々に――夏のそよ風、
石の縁にいる青色のかわせみ、
私の心の奥底の――完全な落ちつき、
ここ西南院の庭。

2

人生のどうでもいいような心配事、取るに足りないこと
それら全てはずっと遠くに去ってしまった。
ここはお寺
和やかになっていくように感じる、
宇宙と合一するとき、敵・味方の思いが消え去っていく。
本当にどんな区別も離れていく、
ただ一のみがある。

3

鳥、鳥、鳥

せきれい、かわせみ、鳩。
あなたたちがこのお寺にくるのはどうしてでしょう。
あなたたちの澄み切った美しさを見る時、
仏陀を礼拝するために
来るのだと確信しています。

4

初めての安らかさ
あたかも仏陀が森のほとりに立っているがごとく
指を唇にあてて。
鳥、鯉、葉っぱ、そして私までも
仏陀の存在に気づいて、
全ての動作を一時中断する。

1 連の 1 行、 2 行、 4 行の最初の語彙が全て “In” と表記され、最後の 5 行目も 2 番目の語彙が “in” であり、最後の語彙 “Sainan-In” が表記しているように “In” で締めくくられている。この 1 連目は “In” で始まり、“In” で終わっている。「西南院」の重要性がこの繰り返される “In” で示されている。 1 行目 “carp”（鯉）の “c” 音、 4 行目の “calm”（落ち着き）の “c” 音、 2 行目 “breeze”（そよ風）の “b” 音、 3 行目 “blue”（青色）の “b” 音がそれぞれ響き合っている。また 1 行目 “golden”（金色）の “g” 音、 5 行目 “garden”（庭）の “g” 音も対応している。また 1 行目 “deep pool”（神秘的な池）の “d” 音と 4 行目 “my heart’s depth”（私の心の奥底）の “d” 音も物理的な深さと心理的な深さが交差している様子を表している。

2 連の 2 行目と 5 行目の “All”（全て、宇宙）と 5 行目と 6 行目の “parts”（敵・味方、区別）が対比されている。 7 行目 “only One”（ただ一のみ）は真言宗の主尊である大日如来を指すものと思われる。「すべてのものを照らす高遠な仏（遍照高仏）といわれるように、大日如来には、仏教の開祖釈迦の歴史的卓抜性（応身）の性格も、すべ

ての人々の要請に応じる救済仏的性格（報身）も、全宇宙そのものという普遍的性格（法身）も併せ持つ。」[19)]

3 連の 1 行目は “birds”（鳥）が 3 回繰り返されている。 2 行目は 3 種類の鳥、せきれい、かわせみ、鳩が登場する。 1 行目と 2 行目ともに数字の 3 が強調されている。仏教には数字 3 と結びついた熟語は多い。「三句」は真言密教における重要な三種の法門という。「仏は菩提心を因と為し、大悲を根と為し、方便を究竟と為す。この三句は真言密教の大宗にして、一切の仏教を摂する法門である。」[20)]真言宗にも造詣の深い鈴木ビアトリスはそのような「三句」も意識していたかも知れない。鳥たちも仏陀を礼拝するために来たと、詩の中で詠う。それはきっと「三句」を学ぶために来たのであろう。そして 4 連では一切の存在が仏陀の存在を認識して心の安らかさを覚える様子が書かれている。

（参道）

5

I walked among the graves at Koya San,
City of the dead and giant trees,
Engraved stones a mile before me,
Chiseled stones a mile behind me,
Statues of Buddhas all around me,
I picture the dead living again,
Princes, daimyos, priests, devotees,
They walk among the trees at Koya San,
They seem living and I seem dead.
Thus beholding their pageantry
I walked among the graves at Koya San,
City of the living and great trees.[21)]

私は高野山の墓所の中を歩いた、
死者と並外れて大きな木々の町、
前方かなりの距離まで続くお墓、
後方かなりの距離まで続くお墓、
あたり一面の仏像、
再び生きている死者を心に描く、
親王たち、大名たち、僧侶たち、帰依者たち、
彼らは高野山の木々の間を歩く、
彼らは生きているように見え、私が死者のように思われる。
このように彼らの壮観さを見守りながら
高野山の墓所の中を歩いた、
生者と巨大な木々の町。

この 5 連で興味深いのは時制を逆転させていることである。この世でこの詩を書いている作者が 1 行目で “walked”（歩いた）と過去形を用いている。それに対して下から 5 行目では亡くなった死者たちが “walk”（歩いている）と現在形が用いられている。下から 4 行目では死者たちが “living”（生きている）ように見え、生きている作者が “dead”（死んでいる）ように見えるといったように、死と生が逆転して渾然一体となった様子が描かれている。上から 2 行目では「死者と並外れて大きな木々の町」と表現しているが、一番下の行では「生者と巨大な木々の町」と表現されて、死者と生者が逆転している。死と生が一体となっている。

鈴木ビアトリスは「眞言では智慧の目を見開き妄想を滅ぼして自己を見ればすでに佛陀であることを知れる者と考へるのであります。妄想の重なものは我執であつてそれが人間の本性である佛性を覆うて居るからであります」[22] と述べている。彼女のこのような論考がこの詩において表わされている。特に 5 連の上から 6 行目の「再び生きている死者を心に描く」という表現は「多く涅槃を滅であると考へて居ら

れますが、眞言では之を絶対の實在で、正覺と同じものだと考へて居ります。涅槃に達しますと、自己が攪大して大日如来と合一し、其處で又すべての自己と一つになるのであります。涅槃に達しますと本當の個性が失はれるのではなくて、夫々の個人が宇宙の中心となるのであります。然し乍ら他のすべての人々も自己と同様であるといふ事を證らねばなりません。是が無我であります」[23]という彼女の言葉を言い換えたものと思う。

（奥院）

6

Among the lofty trees of Koya
The moon looks down upon the graves;
At the inner shrine stop and gaze
Where Kobo Daishi sleeps in peace.
He is not dead, they say,
He is sleeping (how near Death is to Sleep!)
He is waiting for Maitreya. Is he lonely?
How can he be lonely?
The devotees come and go,
Reverence given, adoration,
Kobo Daishi sleeps in peace
Among the giant trees of Koya,
Waiting he knows not of sorrow and loneliness,
Watching for Maitreya,
Watching for Maitreya.[24]

高野山のそびえ立つ木々の中の
墓所を月が見ている；
奥院の御廟を立ち止まって、じっと見ている

そこに弘法大師が安らかに眠っている。
弘法大師は死んでいないと言われている、
弘法大師は眠っている（死は眠りと何と近いことか）
弘法大師は弥勒菩薩を待っている。弘法大師は孤独だろうか。
どうして弘法大師が孤独であろうか。
帰依する人々が次々とお参りにやって来て、
恭しくお辞儀をして、礼拝する、
弘法大師は安らかに眠っている
高野山の並外れて大きな木々の中で、
弘法大師は待つことを難儀でもなく、孤独でもないことを心得ている、
弥勒菩薩を待ち受けている、
弥勒菩薩を待ち受けている。

6連にも墓所が2行目に書かれている。この墓所は先ほどの5連にも描かれている。鈴木ビアトリスはこの詩が掲載されている論考で「高野山の主要な見どころは墓地である」（The chief sight at Koya-san is the cemetery）[25]と述べているが、それが詩の中でも詠われている。鈴木ビアトリスはこの論考で「弘法大師は今もお墓の中で生きており、入定修行三昧で、弥勒菩薩の到来を待っていると弟子たちは信じている」（his followers believe that he is still living in the tomb, lost in contemplation, awaiting the coming of Maitreya, the future Buddha）[26]と述べていることがこの6連で詠われている。この詩が1931年に書かれてから百年近くの今日である。エリザベス・ティンスレイも言っているように高野山はユネスコの世界遺産に登録されて「女性、特に外国人女性や独身女性の高野山参拝が推し進められている」[27]という。女性参拝者が少なかった鈴木ビアトリスの時代に比べて画期的なことである。現代の参拝者達も鈴木ビアトリスが感動した高野山の荘厳さを現代の人も知ってほしいと彼女は願っているのではないか。この詩が

そう言っているように思う。

次の詩は円覚寺についてである。

At Engakuji (April)

The shadows are falling in Engakuji;
Cherry mingles with pine;
The temple bell booms;
A black-robed priest intones the praises of Kwannon—
I sit musing on the thought that all are destined for
Buddhahood.
Yes, even I, and my soul is lost in mystery and contem-
plation.
There is a glimpse—of what?
A bird flies overhead, a frog croaks, a voice calls—
I return to my cage in dismay.
Ah, this world!
But the glimpse ! The world transformed![28)]

圓覺寺で（四月）

夕闇が垂れ込めている圓覺寺；
桜と松が入り混じり；
梵鐘の音が響く；
一人の墨染衣の僧侶が唱えている観音普門品偈——
坐禅する私、すべてが悟りの境地への
思いで。
そう、穏やかな私、私の心は神秘さと坐禅三昧に
入っている。
それとなく感づくことがある——何について
一羽の鳥が頭上を飛んで行き、一匹の蛙が鳴き、

一人の声が呼び寄せる――
慌てふためいて私の部屋に戻る。
ああ、この世界。
しかしそれとなく感づくことがある。一変した世界。

上から4行目を「一人の墨染衣の僧侶が唱えている観音経普門品偈（かんのんぎょうふもんぼんげ）」と訳してみた。原文の “the praises”（名詞の複数形）は『オックスフォード現代英英辞典』の定義1では頻度は低いが “words that show approval of or admiration for sb / sth”（誰かをあるいは何かの称賛をあるいは敬服を示す言葉）となっている。また『ランダム英和大辞典』の定義2には「（文・詩・歌による神の崇拝などの）賛美、讃歌、頌、頌詞」となっている。仏教では「偈（げ）、諷誦（ふじゅ）、偈頌（げじゅ）」ともいう。『観音経普門品偈』は『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五偈頌』のことである。その偈頌の一節は次のように詠われている。「真実なる観察・清浄なる観察と広大な智慧による観察、憐れみの眼と慈しみの眼と（を有する者）を、常に願い常に仰ぎ見よ。けがれのない清らかな光を有する智慧の太陽は多くの闇を破り、災難の風火を消して、くまなく世間を明るく照らすことができる。（中略）妙なる音声をもつ観世音は、清らかな音声、海の潮の音、かの世間に優れた音声を有する。それ故に常に心に念じよ。念じよ、念じよ。疑いを生じてはならない。清らかな聖（ひじり）の観世音は、苦悩と死のわざわいにおいて拠りどころとなることができるのである。あらゆる功徳を具え慈しみの眼をもって衆生を見るのだ。福徳のあつまりの海は量りしれない。それ故におしいただいて礼拝すべきある。」[29)]

岡本かの子（1889–1939）はこの観音経について次のように述べている。「普門品の中には一つも難しい理屈や教理を説かずに、平易通俗の実践に依って直ちに大乗の深理を現実生活上に体験させることが述べられてあります。私たち日常の生活中に起こる色々の願望や、事

件が、ただ観世音菩薩の御名を唱えることだけによって、手っとり早く簡単に、且つ直接的に処理されて行き、而かも容易に法華経教義の心髄にまで到達し得ることが記載してあります。それで普門品はあだかも、家庭薬化された法華経のようなものであります。」[30]鈴木ビアトリスと岡本かの子は共に仏教について発信した。一方は英語で、他方は日本語であったが世代的に重なる部分がある。

岡本かの子は夫の一平とともに、1921年（大正10年、32歳）キリスト教から仏教への傾倒を深めていく。鶴見総持寺管長新井石禅に一平ともども「修証義」の講話を受ける。また鎌倉建長寺の原田祖岳師に観音庵にて「正法眼蔵」の講話を受け、参禅。後、高楠順次郎の指導で「大蔵経」を閲覧[31]。彼女の年譜によると、例えば1928（昭和3年、39歳）仏教随想「散華抄」『読売新聞』の宗教欄に3月2日から12月6日まで連載等々。40歳の12月、夫や息子の太郎たちとヨーロッパ遊学のため神戸港から船で出発。43歳の3月、帰国。そして仏教講話、仏教についての作品発表。45歳（1934年、昭和9年）には『観音経　附法華経』（大東出版社）出版等々と続いていく。このように鈴木ビアトリスと岡本かの子が仏教について発信していった時代が同じである。岡本かの子は数年外国で暮らしたように外国を意識していたことが分かる。岡本かの子は鈴木ビアトリスのことを知っていたのではないかと思う。つまり間接的にではあるが、鈴木ビアトリスは岡本かの子に影響を与えていたかもしれない。

上の詩では鈴木ビアトリスが圓覺寺で坐禅をしている様子が書かれている。鈴木ビアトリスは「圓覺寺の禅堂は瞑想する諸堂の中でも最も静かな道場の一つである」[32]と述べている。鈴木ビアトリスは圓覺寺について次のように述べている。

> 私は米国にゐた時分に、既に宗演師について、幾らかの禅の教へを學び得て居りましたが、數年前、幸にも圓覺寺の境内に住み、當時の老師でありました廣田天眞師の指導を仰いで、禪堂で坐禪することが出来ました。天眞師は私に、雲水と共に禪堂に坐

り、参禪（僧が師家に謁して公案に對する見解を呈すること）を許してくれました。私は公案を授かりました。

これは一種の問題であり、それに私の意識を決着させるのであります。私は、十二か月を通じて何度も接心に加はりました。この期間には、修行者は何れも、その公案に徹しようと緊張した努力を致します。私は、特別の座席を指定せられ、女性として又西洋人としてあまり目立たないやうにと、黒の法衣を纏ひました。そして接心に期間中、雲水のする修行の一切に参加しました。それで私は圓覺寺の禪堂を、あらゆる季節、あらゆる方面に於いて知るやうになりました。その結果『青蓮』と云ふ法名を與へられ、老師の弟子の一人と見做されました。[33)]

岡島英隆は「鈴木ビアトリスはアメリカでは神智学協会のメンバーであった。鈴木ビアトリスの夫、鈴木大拙がロンドン滞在中（1912年）にスウェーデンボルグ協会で行った英語講演の原稿が吉永進一氏による翻訳『スウェーデンボルグを読み解く 第一部日本篇第二章』（日本スウェーデンボルグ協会編、2007年）で紹介されている」[34)]とした上で、鈴木大拙とスウェーデンボルグについて詳しく調べている。岡島は「鈴木大拙は東洋的宗教の研究者として、また禅仏教の伝道者として、呼吸法を重んじるスウェーデンボルグの宗教思想に深い親近感を抱いたと推測することはあながち的外れではないと考える」[35)]と述べている。鈴木ビアトリスは既にアメリカにおいて仏教と自然科学の関係について関心を持っていたし、彼女の夫である鈴木大拙は仏教とスウェーデンボルグとの接点について思索していた。このことから鈴木夫妻の呼吸が合っていたことが分かってくる。

鈴木ビアトリスは彼女の母親に捧げる詩を残している。

In Loving Remembrance
of my Mother

She is dead, my reason tells me;

But my heart replies, Ah, no!
The birds are singing in the garden.

She is dead, my friends assure me;
But my soul responds, Oh, no!
The flowers are blooming in the garden.

She is living, living in this garden:
Trees and flowers, sky and birds,
All are witness, all are knowing.

―――――――― ・ ――――――――

Do you hear me, see me?
Are you aware of me?
Where you are dwelling now?
Or is your happiness so great
That the mist of joy has drawn a screen
between us?
If so, it is well; I would not disturb you,
But leave you by peace encompassed
　Until we meet again,
　Until we meet again![36)]

母が亡くなった、と私に伝えるのは理性；
い〜や、そうでない　と応じるのは感情。
お話ししている庭の鳥たち。

母が亡くなった、と断言する友人たち；
い〜え、違います、と答えるのは心。
花開いている庭の花たち。

母は生きている、庭で生きている母；
木々、花たち、空、鳥たち、
彼ら全員が証人よ、みんな知っているわ。

――――――――・――――――――

私の声聞こえますか、私が見えますか、お母さん。
私に気づきましたか。
そこに今住んでいるあなた。
あなたはあまりにも幸せ過ぎて
喜びの靄がかかっている
私たちの間に。
そうなら、満足よ；邪魔しないわ、
そっとしておくわ、平和に包まれたあなたを
　また私たちが再会するまで、
　また私たちが再会するまで。

1 連の 3 行に於いては、1 行目の「理性」（reason）と 2 行目の「感情」（heart）が対比されている。2 連に於いては、1 行目の「友人たち」（friends）と 2 行目の「心」（soul）が対比されている。1 連 3 行目の「鳥」（birds）の動と 2 連の 3 行目「花」（flowers）の静が対比されている。そして 1 連と 2 連の夫々の 1 行目の「亡くなった」（is dead）と 3 連 1 行目の「生きている」（is living）が対比されている。庭でお話ししている鳥たち、庭に咲いている花たち、木々そしてお空も彼女の母親が生きていることを知っている証人であることを歌っている。

「1916年12月にはビアトリスの母エマ・アールスキン・ハーン（1846–1927）が来日する。エマは多才なひとで、社会問題を論じ、農園を経営し、ロシア文学を講じ、医学の博士号も持っていた。動物実

験に反対し、動物愛護運動もしていた。ビアトリスの父にあたる夫のトーマス・レーンとは早くに死別したため、ハーンというドイツ人の学者と再婚した。エマは残りの人生を日本で過ごし、京都で亡くなった。大拙夫妻と身近に暮らしていたようだが、同居までしたかどうかはわからない」[37]と山田奬治は書いている。母親のエマ・アールスキン・ハーンは娘の鈴木ビアトリスを頼って日本に来て、日本に住み、日本で亡くなっている。この詩の終りにビアトリスの母、（1927年）８月22日逝去と書かれている。この詩が書かれたのは「1928年８月18–22日、高野山天徳院にて」と追記されている。鈴木ビアトリスは母親が逝去された１年後、１周忌の法事を営むために高野山にお参りしたものと思われる。

鈴木ビアトリスは「来日後は真言密教の探究に傾倒し、高野山をたびたび訪れている。」[38]「ビアトリスは10年にわたる真言密教の研究をまとめようとしていて、そのさなかに病に倒れた。６月27日からは（鈴木）大拙は病院に泊まり込んでビアトリスの看病をつづけた。だがその甲斐もなく、７月16日ビアトリスはこの世を去った。享年61歳だった。このとき大拙は69歳、息子のアランは23歳だった。」[39]彼女の母親が亡くなってから12年後であった。

結び

(1) 鈴木ビアトリスは鈴木大拙と結婚するため日本に来てから亡くなるまで精力的に仏教を学び、修行し、仏教について世界に発信し続けた。今回紹介したいくつかの彼女の詩は宗派を超えて寺院についてわかりやすく書かれている作品ばかりである。詩ばかりでなく、彼女が発表した仏教寺院についての論考も東寺、清水寺、南禅寺、知恩院、東本願寺、本圀寺、妙心寺、等々と日蓮宗、禅宗、浄土宗、浄土真宗、真言宗等々と多岐に渡っている。当時としては日本の仏教寺院を大局的な見地から発表していった意義は大きいと思う。彼女は大乗仏教という根本的な立場から大乗仏教や日本の仏教

寺院を紹介し続けた。

⑵　鈴木ビアトリスの詩の中に「観音経」が登場している。いうまでもなく観音菩薩が人々の救済を説いているので「観音経」と呼ばれて親しまれている。観音菩薩を男性と見る人もおれば、女性と見る人もいる。観音菩薩は男性でもあれば、女性でもある。女性でもなければ、男性でもない。性別を超越している菩薩であると見ることも許されるであろう。観音菩薩の化身である鈴木ビアトリスという女性が日本の様々な寺院を訪ねたことは仏教寺院が男女を問わず多くの人々に広く門戸を開くきっかけを作っていった開拓者であったとするのは言い過ぎであろうか。LGBTQ[40]の人々も観音菩薩は喜んで受け入れてくれると思う。鈴木ビアトリスの活動は日本人にもっと男性も女性もお互いに尊重しつつ、感謝の気持ちを持って、平等に生きて行くことの大切さを気づかせてくれたのではないだろうか。

⑶　鈴木ビアトリスはアメリカから母親を呼び、夫である鈴木大拙と手と手を取り合って家庭を守りながら、仏教の修行、仏教についての作品の発表を行った。

⑷　鈴木ビアトリスが病気になった時、鈴木大拙は看病をした。彼女の病気回復を祈って、何でも好き嫌いせずに食べるように勧めたという。アレルギーの食品は別であるが、環境に応じた食物をありがたく頂くように勧めた鈴木大拙の優しさを受けたビアトリスは幸せだったと思う。

註

1）鈴木大拙『鈴木大拙全集 第30巻』（岩波書店、昭和45年）639頁参照。鈴木ビアトリスが亡くなった時代はどんな状況であったろうか。その一端をマルセル・ジュノーは次のように書いている。「1934年東京で赤十字国際会議が開かれ、世界中の国々が、爆撃、監禁、或は流刑の犠牲となった市民の保護に関する一大構想について討議した。しかしそれから5年間、批准の提案を行った国は一国もない。スペイン戦争の体験が生かされるべ

きだった。あの無差別攻撃、大量処刑、一斉射殺、階級的宗教的迫害、政治犯の大虐殺などは、準備された恐るべき大殺戮への警告であったのだ。私の眼前にはバルセロナの子供たちの死体が見える――ビルバオの瓦解した家屋が、人質を乗せたボートを沈めようとして怒号する群衆が見える……私にはまだ、爆弾で吹き飛んだ見すぼらしいエチオピアの小屋が、灰燼に帰したデッシエが、シダモの道をさまよう骸骨が、イペリットガスで充満したクワォラムの平原が、肢体の傷口から出血した幾千もの人々が皇帝に助けを求める姿が見える……アビート……アビート……アビート……（哀れみ給え……）今これらすべてが、その十倍、百倍の規模で繰り返されようとしている……我々はそれを知っている。その任務に打ちのめされそうだ。」（マルセル・ジュノー『ドクター・ジュノーの戦い』丸山幹正訳、勁草書房、1991増補版［1981初版］121–122頁）。

2）鈴木大拙「はしがきと思ひ出」1–13『青蓮佛教小觀 12編』（鈴木貞太郎発行、昭和15年、非賣品）1–2頁。

3）鈴木ビアトリス「大乗佛教の魅力―私はなぜ佛教徒になったか―」3–5同上書、 3頁。

4）田中泰賢「スティーヴンズとサンタヤナ」61–77 『Buddha 英語 文化 田中泰賢選集② スティーヴンズ、ウィリアムズ、レクスロスの仏教』（あるむ、2017）61頁。

5）ヴァン・ミーター・エイムズ『禅とアメリカ思想』中田裕二訳（旺史社、1995）324–325頁。

6）サンタヤナ「アメリカ的性格、アメリカ的意見」海老根宏訳『アメリカ古典文庫21 ヨーロッパ人のアメリカ論』本間長世解説（研究社、1982）289–290頁。

7）同書、290頁。

8）ジュディス・スノドグラス「両大戦間の日本における英文出版物に対する鈴木夫妻の寄与」123–159　金子奈央訳『鈴木大拙 禅を超えて』編者山田奬治、ジョン・ブリーン（思文閣出版、2020）126–127頁。

9）鈴木ビアトリスが英訳した大谷句仏（大谷光演上人）の俳句については、田中泰賢「詩人たちの願い」『英米文学手帖』第60号、2022年12月参照。

10）『青蓮佛教小觀』259頁。

11）同書、11頁。

12）同書、203頁。

13）『佛教大事典』（小学館、昭和63年）参照。

14）ロバート F. ローズ「The Eastern Buddhist 創刊号に思う」『大谷大学図書館・博物館報』8–9（第35号、2018）参照。

15）上田卓爾「鈴木琵琶子（鈴木大拙夫人）の「京洛逍遥」について―その１―」1–7 『金沢青稜大学論集』第51巻第２号（平成30年３月）１頁。上田卓爾は鈴木琵琶子が書いた Rambles in Ancient Kyoto の掲載号と掲載内容（主な寺院名）を表にしてわかりやすくしている。それによると1932年５月号から始まり、1937年７月号まで11回書いている。

16）『青蓮佛教小觀』256頁。

17）「後記」「青蓮佛教小觀」。

18）『青蓮佛教小觀』257頁。因みに Seiren “In Buddhist Temples V. Koya-San”: 360–368 (*The Eastern Buddhist*, Vol. 5, No. 4, 1931) 及び Seiren—Blue Lotus “Mount Koya 高野山”: 111–117 (*Buddhist Temples of Kyoto and Kamakura*, equinox, 2013) 参照。

19）『佛教大事典』524頁。

20）同書、344頁。

21）『青蓮佛教小觀』258頁。

22）同書、97頁。

23）同書、104頁。

24）同書、258頁。

25）Seiren “In Buddhist Temples V. Koya-San”: 360–368 (*The Eastern Buddhist*, Vol. 5, No. 4, 1931), p. 361.

26）同書引用文中。

27）Elizabeth Tinsley “Mount Koya Today”: 119–120 (Beatrice Lane Suzuki, *Buddhist Temples of Kyoto and Kamakura*. Edited by Michael Pye, with the assistance of The Eastern Buddhist Society, equinox, 2013), p. 119.

28）『青蓮佛教小觀』256頁。

29）『現代語訳 妙法蓮華経』藤井教公訳（アルヒーフ、2010）368–369頁。

30）岡本かの子『岡本かの子全集 10』（筑摩書房、1994）175頁。

31）岡本かの子『岡本かの子全集 12』（筑摩書房、1994）464–465頁。

32）Beatrice Lane Suzuki, *Buddhist Temples of Kyoto and Kamakura*, p. 88.

33）『青蓮佛教小觀』154頁。

34）岡島英隆『対話哲学としての道元思想』（法蔵館、2021）321–328頁。

35）同書、338頁。

36）『青蓮佛教小觀』260頁。

37）山田奬治『東京ブギウギと鈴木大拙』（人文書院、2015）36頁。

38）同書、37頁。

39）同書、112–113頁。

40）LGBTQ についての補足。

台湾のコンピュータ界における偉大な10人の一人である唐鳳（オード

リー・タン、1981–）は「2005年末に女性となり、名を唐宗漢から唐鳳に変え、英語名を Autrijus から Audrey に変えた。

タンは、自らが選んだ新たな人生によって、弱者への共感がより強まったと述べている。

2019年 5 月、台湾では同性婚特別法が成立し、アジアで初めて同性婚が法的に認められた。

（文／嵯峨 隆（静岡県立大学名誉教授）『東亜』2021年 1 月 No. 643、64頁参照）